情報化社会と国語教育

矢澤真人
文芸・言語学系助教授

はじめに

「IT 革命」のかけ声のもと，学校現場においても情報教育の取り組みが進められている。当初から情報教育を担ってきた技術家庭科や理科教育はもとより，社会科教育や英語教育でも，授業にコンピュータをどう活用するかが盛んに話題にされているようだ。これに対し，国語科では，総じて，コンピュータを用いた教育に対する熱意が低いように見受けられる。実際，小・中学校で国語教育に取り組む何人かの教員に聞いてみても，積極的にコンピュータを取り入れようとする意見は少なく，用いるにしても，教材に関連してあらかじめ調べておいた「お薦め」のホームページにアクセスさせるくらいであるという。このような時代だから，私はむしろ書くことにこだわった授業を心がけたいという意見もあった。

国語科そのものが情報教育に不熱心というわけではない。いわゆる NIE に対する教員の興味はそれなりに高いし，図書館での活動も少なくない。ただ，コンピュータに関しては，自分で使うことはやぶさかではないし，他教科での実践に注意も払いはするものの，国語の授業に受け入れることには及び腰なのである。

なぜ，国語科ではコンピュータの導入に及び腰になるのか，情報化社会は国語教育に何をもたらすのかといった点について，いささか私見を述べようと思う。

ローマ字入力とローマ字表記法

国語の授業へのコンピュータの導入を阻害する原因の一つが，コンピュータの日本語変換システムが国語科の指導内容とそぐわないという点である。

現在のローマ字入力方式が小学校で習うローマ字表記法と微妙に異なることは，誰もが気づくことだろう。コンピュータのローマ字入力では，例えば，tarouhagakkouniikimasita と入力すると，

逐次仮名に変換され，「たろうはがっこうにいきました」という仮名文字列が出される。この文字列に文節解析や文法解析を加えて，変換辞書から適切な表記が当てられる。ローマ字入力は，仮名文字列を導くための一時的な方策にすぎない。これに対し，ローマ字表記法は，ローマ字だけで日本語を表すことが目的である。

もともと目的が違うのだから，方式が違うのも当然で，ローマ字表記法では，読みやすくするために分かち書きが欠かせないが，ローマ字入力では，文節解析の技術次第で，先の例のように一文を一続きにつづることも許される。

だが，両者は，日本語をローマ字で写すという点では共通する。教育現場で両者を同時に提示することは混乱を招くし，この違いを理解させることも容易ではない。両者がそれほど離れず，できれば一致させることが望ましい。

現在のローマ字教育

平成11年の小学校学習指導要領では，国語科におけるローマ字指導について，〔第3学年及び第4学年〕の〔言語事項〕において次のように示している。

（ウ）第4学年においては，日常使われている簡単な単語について，ローマ字で表記されたものを読み，また，ローマ字で書くこと。

このローマ字の表記は，昭和29年に内閣告示された「ローマ字のつづり方」に準拠する。「ローマ字のつづり方」は，訓令式をもとにした「第1表」とsha tsu cha ja di fu kwa woなど，「国際的関係その他従来の慣例をにわかに改めがたい事情にある場合に限り」用いることが出来る表記を示した「第2表」，および，撥音や促音，長音，特殊音，語頭の表記などについて示した「そえがき」からなる。「ローマ字のつづり方の実施について」という後文の最後に「今後，各官庁において，ローマ字で国語を書き表わす場合には，このつづり方によるとともに，広く各方面に，この使用を勧めて，その制定の趣旨が徹底するように努めることを希望する。」とあるように，強制力を持っている。長音は母音の上に^をつけなくてはならないし，助詞「は」や「へ」はwaやeと表記しなくてはならないのである。

しかし，この「ローマ字のつづり方」は，外来語を多く含む現在の日本語を表すには，すでに適しないものとなっている。片仮名表記では，「ティ」「トゥ」など，外来語を表す表記が一般化し，平成3年内閣告示の「外来語の表記」で規定

され，「学校教育においては，この趣旨を考慮して適切な取扱いをすることが望ましい」とされている。これらのローマ字表記は，「特殊音の書き表わし方は自由とする」（「そえがき」5）という例外処置のまま，現在に至っている。国語教育では，「ティ」や「トゥ」などを含む外来語の表記については，一切触れないことで対処している。

さらに，もう一つ，小学校で指導されるのが「単語」の読み書きであって，文章をローマ字で書く方式は指導されないという問題がある。助詞の「は」は「wa」と書くと教えられても，「tarôwa」と文節を連綴するのか，「tarô wa」と単語ごとに区切るのか，「tarô-wa」とハイフンを入れるのかは，定められていない。そして，通常，小学校4年生でローマ字が扱われたあとは，国語科で再び扱われることはないのである。

コンピュータの導入は，ローマ字入力とローマ字表記法とのずれを意識させ，現行のローマ字表記法やローマ字教育の不備を露わにする。それに対する的確な対処がとれない現段階では，コンピュータの導入を諸手をあげて歓迎できないのだ。しかし，日本語教育や2バイト文字が通らないシステムでの日本語使用の面からも，ローマ字表記法の整備は要請されており，日本語学習者のワープロ使用のネックにもなっている。コンピュータ導入は，むしろ，ローマ字表記法やローマ字教育のあり方を考え直す良い機会だと前向きに捉えるべきであろう。

コンピュータ導入における無理解

コンピュータの導入を図る側が，こうした状況を十分ふまえた上で推進しているのかというと，それも怪しいようだ。

日本語変換システムには，ローマ字表記法や学年別配当漢字の問題など，学校教育の現場では問題となる点があることは，早くから指摘されていた（箭内敏夫『電脳辞書の国語学』おうふう　など）。また，それを受けて，日本語変換システムの開発側と日本語研究者や国語教育者とで検討会を設けられもした（月刊アスキー連載「電脳日本語論」）。しかし，この問題意識は，一般に共有されるには至らなかったようである。

実際，筑波大学で進められているインテルプロジェクトでもこの問題は等閑視されていた。アメリカですでに用いられているガイドブックの日本語版を作り，それで最終的に児童・生徒に及ぶカリキュラムを組もうとしているが，ここで用いることが要請されている日本語変換システムでは，全くこれに配慮されてい

ない。プロジェクト内でも，e-mailやワープロ，表計算ソフトなどの活用については議論が交わされたようだが，日本語変換システムに伴う問題については，正面から取り扱っていないようである。

「正しい日本語」への思い入れ

一方，国語科教員の側にも，国語教育について，「正しい日本語を守ることが自分たちのつとめである」といった過剰な思い入れがあるようだ。

言語教育は，生徒達に社会生活を営むのに十分な言語能力をつけるのが目的であり，社会の状況が変われば，それに応じた内容を提供しなくてはならない。ワープロという，手軽に活字体で文書を提供できる道具が普及したら，当然，それに応じた言語能力を身につけさせる必要がある。「原稿用紙の使い方」に終始するのではなく，「A4の用紙のレイアウト」の指導もすべきである。

「国語の心」は，道具に左右されないというかもしれないが，所詮，言葉も伝達の道具に過ぎない。「正しい日本語」も社会状況によって変化する。

先にあげた「書かせることにこだわる」という意見は，たぶん，日本語変換システムを用いることによって漢字が書けなくなることを，漢字をより多く書かせることでカバーしようというのであろう。すでに，日本語変換システムは，携帯電話にも搭載されているような身近なものとなっている。今後はさらに，日本語変換システムによって，適切な表記で単語を出すことが普通になり，自分の記憶だけで文字を書くことの方がまれになっていくだろう。手書きの年賀状が好感を持たれるように，書くことが特殊な意味合いを帯びるようにもなる。そういう状況では，「適切な表記で単語を出す」指導が先にあり，それを補完する形で「文字を書く」指導が行われることが望ましい。ペンの普及により，筆書きが「毛筆習字」という位置づけになったように，日本語変換システムの普及により，「文字を書く」ことに新たな位置づけがなされるのは当然であろう。

「適切な表記で単語を出す」指導とは，語彙教育に他ならない。これまでのように「文字を書く」ための指導を長時間かけて行った漢字教育から，言葉の意味と表記が一体になった形で指導する語彙教育へと転換させるいい機会でもある。

国語教育にコンピュータを導入することで最も期待される成果とは，今，言語教育に何が求められているのかを，国語科教員自身が再確認することにある。

（やざわまこと　日本語学）